

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

中華学校に通う日本の子どもたち

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2012-02-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 陳, 天璽 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4585

研究ノート

中華学校に通う日本の子どもたち

陳 天璽*

キーワード：「多文化共生」、中華学校、華僑華人、マイノリティ

目次

- I はじめに
- II 越境者の増加とともに多民族化・多文化化する日本
 - 1 欧米志向の「国際化」から、国内で実践できる「多文化共生」へ
 - 2 40万人を超える日本国籍帰化者
 - 3 国際結婚の増加と家庭における多文化化
- III 日本における中華学校の近況
 - 1 「インターナショナル・スクール」と「民族学校」
 - 2 中華学校の設立背景と教育内容
 - 3 急増する入学希望者
- IV 中華学校に通う日本人生徒
 - 1 個性を伸ばす教育を求めて
 - 2 中国文化を担う子どもたち
 - 3 日本人卒業生からのメッセージ
- V おわりに

I はじめに

日本に在住する華僑華人¹⁾子弟の教育を目的としてきた中華学校に、中国系以外の子どもの就学や入学希望者が増加している。たとえば、横浜中華学院では数年前まで、一学年一クラス10数人で構成されていた学級に、近年では、定員36人の2倍近い入学希望者が押し寄せるようになっている。入学希望者の大幅な増加の原因をたどると、これまで中華学校の射程に入っていなかった華僑華人

以外の子ども、なかでも特に日本人²⁾生徒が増えたことがあげられる。また、国際結婚をした両親のもとに生まれた生徒の増加も目立っている。

日本における中華学校は、神戸、大阪、東京そして横浜に2校の合計5校ある。大きく台湾（中華民国）系と中国大陸（中華人民共和国）系に分類される。神戸中華同文学校と横浜山手中華学校は、大陸系に属しているため漢字は簡体字、発音記号はピンイン（拼音）を使用している。学校行事で用いられる暦は日本と中華人民共和国のものを基本としており、祝祭日もそれに倣っている。横浜山手中華学校に関していえば、中華人民共和国の建国記念日にあたる国慶節（10月1日）は、学校をあげて大きなイベントを行っている。

一方、東京中華学校、横浜中華学院、大阪中華学校は、台湾（中華民国）の教育部の教育課程を採用しており、教科書も基本的に台湾で使われているものを使用している。そのため学生が学ぶ漢字は繁体字（たとえば、「国」ではなく「國」）であり、発音も主に注音符号を使用している³⁾。暦は日本と台湾の祝祭日に沿っており、中華民国の建国記念日である双十節（10月10日）のほか、孔子生誕祭（9月28日）など伝統文化に沿った祭や儀礼を教育現場に取り入れている。

大陸系、台湾系にかかわらず、中華学校はいずれも「（1）華僑華人の子弟への母語（中国語）と母国に関する知識の教育、（2）伝統知識にそった道徳教育、（3）民族の自覚、（4）中日の友好親善事業に積極的に貢献できる人材の育成」など、教育目標の大きな柱は共通している。よって、本論では以上で紹介した5校を包括して中華学校と呼ぶ。インタビュー対象や各校のケースについて触れる際は別途学校名を明記することとする。

中華学校から「多文化共生」を考える

本稿では、建校してから110年〔横浜中華学院2007〕来、未曾有の変化に直面している日本の中華学校に注目し、その現場から、近年日本でとみに議論される「多文化共生」〔駒井 2003；川村2008〕について考えたい。

「多文化共生」や「多民族共生」を標語に、社

* 国立民族学博物館



写真1 中華街で行われたパレードに参加する保護者たち

会という大きな枠組みのなかで、さまざまな民族や文化背景を持つ人々の共生を目指すとき、マジョリティである日本社会や日本人側が、マイノリティである外国人を受け入れるという「日本人対外国人」の二項対立の構図で描かれてきたように思う。受け入れる「主人」は常に日本側であり、受け入れてもらう「客人」はマイノリティである外国人であった。しかし、日本の中華学校では、まさに「主人」と「客人」が逆転するという現象が起きている。日本人の保護者はわが子の人生に大きな影響を及ぼすであろう教育現場に、これまで「民族学校」として他者化してきた中華学校を選択している。社会の「主人」であった日本人たちが、マイノリティである「客人」の文化を学び、またその一員として積極的にコミュニティに参画している。

なぜ、中華学校へ子どもを入学させることを希望する日本人が増えたのだろうか。新しい形の「多文化共生」が、中華学校に露呈しているのではないか。

これらの問いを、日本の社会的背景と中華学校に通う生徒のケーススタディーによって解明したい。まずはじめに、(1) 多様な外国人の流入に伴い、日本がかつての欧米志向の「国際化」から、国内における「多文化共生」を謳うようになった歴史の変遷をたどる。次に(2) 越境者、定住者、帰化者、国際結婚など各統計をもとに多民族化・多文化化している日本の実態を明らかにする。(3) 中華学校の設立背景、教育内容、学生の推移と現状分析、(4) 中華学校に入学している日本人生徒とその保護者のインタビューを通して、新しい形の「多文化共生」の実態を分析する。

なお本論は、筆者が2006年8月より横浜中華学院に通う一生徒の保護者として同校で行った参与観察を通して得た情報とデータのほか、2007年4月より2008年12月まで、数回に分けて横浜山手中華学校、横浜中華学院、大阪中華学校、神戸中華同文学校の先生、生徒と保護者、そして卒業生に対するインタビュー調査で得た情報をもとに分析を行う。

II 越境者の増加とともに多民族化・多文化化する日本

ここでは、1 出入国者の推移と入国者の出身地、2 帰化者、3 国際結婚に関する各統計の分析を通して、多民族化・多文化化する日本社会の変化を見てゆく。

1 欧米志向の「国際化」から、国内で実践できる「多文化共生」へ

日本の出入国者に関する統計データから、国境を越えて移動する人々の推移を見てみたい。まず、表1にある外国人の入国者数を見ると、1975年の78万人から増加傾向を示しており、30年間で10倍近く増えているのがわかる。一方、日本人の出国者も30年間で7倍近い伸びを示しており、日本の国境を出入りする人々が増加していることがわかる〔山下 2007〕。なかでも再入国をしている外国人の伸び率が著しい。これは再入国ビザを所持している外国人、つまり日本に定住している外国人が増えていることを示しており、日本社会が多民族化・多文化化していることが推測できる。

表1 日本における出入国者数の推移（1975-2005）

年	外国人の入国者数			日本人 出国者数	再入国者割合 (%)
	新規	再入国			
1975	780,298	653,247	127,051	2,466,326	16.3
1980	1,295,866	1,087,071	208,795	3,909,333	16.1
1985	2,259,894	1,987,905	271,989	4,948,366	12.0
1990	3,504,470	2,927,578	576,892	10,997,431	16.5
1995	3,732,450	2,934,428	798,022	15,239,708	21.4
2000	5,272,095	4,256,403	1,015,692	17,818,590	19.3
2005	7,450,103	6,120,709	1,329,394	17,403,565	17.8

資料：法務省大臣官房司法制調査部編『出入国管理統計年報（各年版）』

表2 新規入国者の地域別割合（%）

年	アジア	北米	ヨーロッパ	南米	その他
1975	30.6	40.3	21.3	2.2	5.6
1980	42.5	29.7	21.6	2.4	3.8
1985	48.2	26.8	19.4	1.2	4.4
1990	58.2	20.0	16.2	3.0	2.7
1995	59.7	19.1	15.5	2.6	3.1
2000	58.3	18.4	17.1	1.9	4.2
2005	67.7	14.8	12.5	1.1	4.0

資料：表1に同じ。

表2は、日本への新規入国者を出身地域別に分け、その割合を示したものである。1975年当時、北米とヨーロッパを合わせた欧米出身者（以下、欧米系）が6割を占めていた。その後、アジアからの入国者（以下、アジア系）が年々増加し、1985年には、欧米系を超える。2005年では、アジア系が約7割、そして欧米系が3割と、その割合が逆転しているのがわかる。アジア系で特に多いのは、韓国や中国、そしてフィリピンから来日している人々である。なかでも特に中国から来日する人々の増加が著しい。また、1990年、95年において南米出身者の増加が見られるが、これは1990年の「出入国管理及び難民認定法」が改正され、「日系人」の来日の流れを作ったことに起因している。

1980年代頃まで、日本で「国際化」といえば、英語を身につけ欧米との交流を深めることや海外（特に欧米諸国）に赴くことをイメージしていたように、外国人一般を意味するはずの「ガイジンさん」といえば主に白人である欧米系の人々をさしていた。よって、欧米系以外の外国人を「国際化」実践の対象としてとらえるという意識も薄かった[庄司・金 2006]。

しかし、1980年代後半以降、アジアから来日した外国人が急激に増加し、しかも定住化する人々が増えるなかで、日本は、欧米志向の「国際化」よりも、むしろ生活に密着した「国内で実践できる『国際化』」に取り組む必要性に迫られるようになった。NGOが定住外国人向けに行っている日本語の支援や通訳ボランティアは1990年代以降増えはじめ、自治体で発行する情報紙も英語のみではなく、中国語、韓国語、タガログ語版、ポルトガル版など多様な言語で作成するという変化が見られた[梶田 2001]。外向きの「国際化」だけではなく、「内なる国際化」の重要性に気付かされたといえる。「多文化共生」「多民族共生」への関心が高まったのもこうした社会的背景に起因している。

2 40万人を超える日本国籍帰化者

外国人として日本に定住する人が増えているだけではなく、日本国籍を取得する外国人も増えている。近年、毎年約1万5千人の外国人が帰化によって日本国籍を取得している。なお、1952年以降、韓国・朝鮮系や中国系を中心に、約40万人の外国人が日本国籍を取得したことが法務省の統計からもわかる。日本政府は国民に関して、民族的背景による分類を行っていない。そのため、日本国籍者のうち外国に出自を持つ人の割合は不明であるが、近年顕著に見られる外国人の帰化状況からも日本が「単一民族国家」でないことは明らかである[庄司・金 2006]。

3 国際結婚の増加と家庭における多文化化

日本を往来する人々の増加に伴って、国際結婚をするカップルも増えている。1965年において、日本

で結婚したカップルのうち国際結婚の数は4,156組(全体の0.4%)であったが、1985年には12,181組(同1.7%)、そして、2005年には41,481組(同5.8%)と増加している。つまり現在日本で結婚しているカップルの18組に1組が国際結婚ということになる。後における中華学校の生徒の出自に関する統計データからも、国際結婚をしている両親を持つ生徒の比率が7-8割にのぼることが明らかとなっている。

しかも1975年以降は、夫が日本人で妻が外国人である夫婦が増加している[過 1999]。国際結婚の増加は、社会の基本単位である家において多民族化・多文化化が進行していることを意味する。生まれてくる子どもたちは日本では「ハーフ」や「ダブル」と呼ばれるが、彼らを「なに人」とみなすかは容易ではない。例えば、日本人の父と中国人の母のもとに生まれた子は、日本国籍を付与され法的には「日本人」となる。彼らは学校やテレビなど日本社会から多くの影響を受けて成長する一方で、家では食事や宗教、日常会話など母を通して中国文化の薫陶も受けるだろう。彼らにとって多様な文化が入り混じっているのが自然なのである。

日本は「単一民族国家」の幻想を抱いてきたため「日本人対外国人」の二項対立の図式に慣れてきたが、国際結婚のもとに生まれてきた子どもたちは、もはや「日本人対外国人」の図式には納まらない存在である。彼らは真の意味での多民族共生・多文化共生を、身をもって表しているといえる。

こうした子どもたちの増加や外国人定住者に伴う外国人児童の増加は、学校現場に如実に現れている。文部科学省が日本各地の公立学校を対象に「母国語による支援が必要な外国人児童」に関する統計を行っていることから、そうした状況がうかがえる。日本における外国人学校でもさまざまな変化が起きている。以下では、日本にある中華学校に着目し、中華学校の現場で起こっている変化から「多文化共生」について考えていきたい。

Ⅲ 日本における中華学校の近況

1 「インターナショナル・スクール」と「民族学校」

現在日本には、朝鮮学校、中華学校、アメリカン・スクール、ドイツ人学校、ブラジル人学校、

インド人学校、フィリピン人学校など外国人学校が約200校ある。外国人学校とは、日本に在住する外国人児童の教育を目的に創設された教育機関を指し、インターナショナル・スクールとも呼ばれる⁴⁾。

おおまかに分けると、算数の教授法で注目を集めているインド人学校、そしてブラジル人学校やフィリピン人学校などは、当該国から来日し定住する人々が増えた1980年代以降に、新たに設立されたものがほとんどである。

これらの学校が新設されるまで、日本における外国人学校は主にドイツ人学校、カナディアン・スクール、アメリカン・スクールなど欧米系の学校と、中華学校や朝鮮学校などアジア系の学校に大分された。一般的に、欧米系の学校は「インターナショナル・スクール」と呼ばれ、アジア系の学校は「民族学校」と呼ばれるという興味深い区分(呼称の使い分け)がなされてきた。前述した欧米志向＝「国際化」と考えていた日本の風潮と呼応するかのように欧米系は「国際的」であって、アジア系は「民族的」だというイメージや先入観が外国人学校の呼称にも表れていた。

わが子に「国際的」な教育を受けさせたいと考える保護者は、英語を習得させるため、子どもを欧米系の学校に通わせることは60年代から見られた現象である。しかし学費が高い(年間約200～300万円)という事情もあり、子どもを「インターナショナル・スクール」に通わせることのできる家庭は一部の富裕層に限られ、一般的には羨望の目で見られることもあった。一方、中華学校や朝鮮学校など、アジア系の学校は「民族学校」と呼ばれ他者化されており、一般の日本人とは無縁であった。日本社会とかかわりがあったとしても「チマチゴリ切り裂き事件」⁵⁾に代表されるように、差別的なまなざしで見られることが多かった[神奈川県渉外部国際交流課 1992]。アジア系の学校の生徒が日本の学校の生徒と登下校時に口論やケンカをすることは日常茶飯事であった。

しかし近年、前にも見た日本社会が欧米一辺倒であった外向きの「国際化」から「多文化共生」「多民族共生」を目指すようになった社会の趨勢と呼応するかのように、中華学校をわが子の学校教育の選択肢に取り入れようとする保護者が増えてい

る。中華学校が、中国語・日本語・英語の多言語教育を行っており、学費が手ごろ（年間20～40万程度）であることなども多くの入学希望者をひきつけることとなった。中華学校を「民族学校」とみなし一線を画していた姿勢から、いまでは「中国語版インターナショナル・スクール」を求めてわが子の入学を希望するという日本人の意識の変化がうかがえる〔神戸青年会議所 2008〕。

2 中華学校の設立背景と教育内容

日本における中華学校が他の外国人学校と比べ特徴的なのは、110年を超える長い歴史を有していることである。孫文が革命活動の宣伝で来日した際、方言によって分散している華僑社会に対し、民族教育の重要性を訴えたのがきっかけとなり1898年に大同学校が設立された〔横浜中華学院

2000〕⁶⁾。当時、孫文と親交が深かった犬養毅が名誉校長を務めている。その後、戦争や社会的混乱、政治イデオロギーの分岐に伴い、学校は分裂や合併など幾多の変遷を経て現在の5校に至っている⁷⁾。

授業は基本的にすべて中国語を使用し、小学部では、日本語、英語以外の教科はすべて中国語の教科書を用いている。なお、神戸中華同文学校では、中学部から日本の高校への進学を見据え、中国語や中国の地理・歴史などのほかは、日本の公立学校と同じ教科書を使っているが、授業はすべて中国語で行われている。中華学校では、小学部からネイティブの先生による日本語、英語の授業が行われており、語学教育には特に力が入れている。

音楽や美術などの教科では、各校とも中国の民



写真2 大阪中華学校



写真4 地域の祭りで龍舞をする生徒たち



写真3 学内のポスターはバイリンガル



写真5 胡錦濤総書記と横浜山手中華学校の生徒たち 出所：山手中華学院ホームページ

族音楽や水墨画、切り絵などを取り入れている。また、学生は課外活動で獅子舞や龍舞、民族舞踊などを学び中国伝統芸能を身につける。中華街などでの祭りや地元で国際交流イベントが行われる際、生徒たちは身につけた中国の伝統芸能を披露することも多い〔陳 2007a〕。卒業旅行として、学生たちは中国や台湾を訪問しているほか、中国・台湾から政府高官、各種交流団体が来日した際は中華学校を訪問することが多い⁸⁾。生徒たちは、日本にいながら中国社会・中国文化を身近に感じられる環境のなかで育っている〔杜 1991〕。

中華学校は学校法人の私立学校として運営されている。小学部と中学部までの九年一貫校もあれば、東京中華学校と横浜中華学院のように高等部まで有する学校もある。ほかに、保育部や幼稚部などを併設している学校も多い。しかし、朝鮮系の学校のように大学まで設立してはいない。

中華学校のカリキュラム内容の関係で、日本の「学校教育法」が定める「学校」つまり一条校と認められておらず、美容専門学校や英会話学校などと同様に「各種学校」と扱われている。各種学校であるため、政府からの教育補助金や学校保険制度、指定寄付金、通学定期の割引率の扱いなどあらゆる面で不利な状況におかれている。生徒に身近な例で言えば、公立高校や国立大学受験の際に中華学校の卒業証書では受験資格が認められず、別途「中卒認定試験」や「大学入学資格検定(以下、大検)」が必要とされてきた。しかし実際のところ、高校進学に関していえば、中華学校とゆかりの深い地域は、事実上認定試験なしでの受験を認めており、中学部までしかない神戸中華同文学校〔神戸中華同文学校 2000〕や山手中華学校〔横浜山手中華学校 1999〕、大阪中華学校の生徒はほぼ100%日本の高校に進学している。一方、東京中華学校や横浜中華学院などの卒業生が大学に進学する際、独自の判断で入学を審査してきた私立大学があるほか、2003年9月に公布・施行された「学校教育法施行規則および告示の一部改正について」によって、中華学校の卒業生は国立大学の受験資格を有するようになった。中華学校も、学生たちの進路(日本の大学や高校)を考慮し、受験に対応できるよう日本の教材も授業に取り入れるようになっていく。

3 急増する入学希望者

日本人の場合、各種学校である中華学校への就学は、厳密に言えば義務教育違反となる。そのため、これまで入学希望者は華僑華人子弟に限られ、「民族学校」としての色彩が強かった〔市川 1988〕。

しかし、そんな中華学校に近年大きな変化が起きている。10年前までークラス10数人と少人数で構成されていた学級に、近年はークラス36人の枠を超えるほど入学希望者が増えている。そのため、小学部では願書受付の制限や入学試験を実施するようになった。また、山手中華学校は増加する学生に対応するため、新校舎の設立準備に入っている。2008年末、新校舎報告会が開かれ、2009年3月より工事をはじめ2010年には開校予定であることが報告された。新校舎は現校舎の倍の800人強の生徒数を受け入れられるようになるそう⁹⁾。

中華学校への入学希望者が増えたのは華僑華人人口の増加が原因という単純なものではない。現在、在日中国人(中国国籍保持者、つまり華僑)の人口は60万人。そのうち、学齢期の人口は約2万4千人いる。この数には日本国籍を取得している中国系の児童(つまり華人)が含まれていないため、中華学校が対象としている華僑華人の児童の数はさらに多いのが実情だ。一方、中華学校は現在日本に合計5校、受け入れ可能な学生数は合計で2千人のみである。その限られた枠に中国系(華僑華人)でない日本人生徒が在籍するようになっていく。

大阪中華学校では、2003年頃から日本人生徒が急増し、学校側は統計を行ううえで表3に見られるように便宜上学生を「純日本人」「外国」「中国(単)」「中国」「台湾(単)」「台湾」というカテゴリーに分類し、それらの推移を整理している。2008年末、大阪中華学校の校長先生と教務主任の先生へのインタビューのため学校を訪問した際、ここ10年間の学生の推移を集計したデータを見せてもらった。集計を担当した蔣先生は、「学生を国籍だけで分類しても意味がなくなっている」と吐露し、「多様化する生徒に呼応するため中華学校は日々新しい思考を求められている」と述べた。学校側は試行錯誤の結果、「父母の本籍(出自)をもとにすることで、以上のような分類を新たに設定することになった」という。これまで、中華学校の生

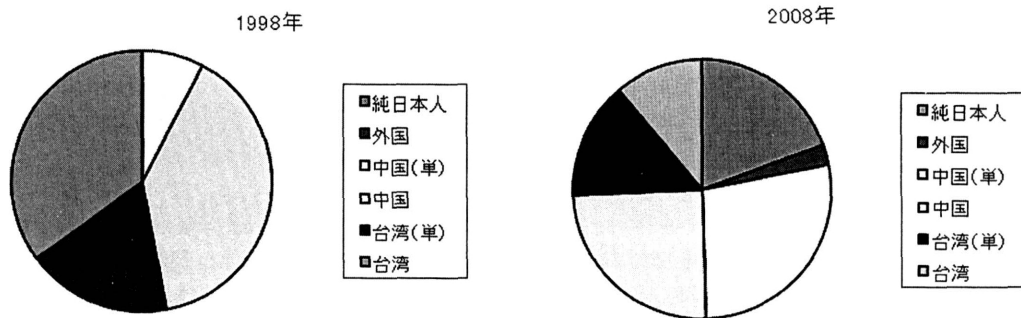
表3 大阪中華学校の生徒数（父母の本籍（出自）による統計）

年度	純日本人	外国	中国（単）	中国	台湾（単）	台湾	全体
1998	0	0	9	46	21	41	117
1999	5	0	8	45	26	38	122
2000	3	0	10	38	27	35	113
2001	6	0	25	47	29	37	144
2002	9	0	24	62	39	41	175
2003	13	0	24	74	41	41	193
2004	29	3	29	69	37	31	198
2005	35	1	41	73	36	29	215
2006	37	3	51	69	35	28	223
2007	37	5	54	67	35	27	225
2008	47	6	67	60	35	27	242
2009	52	11	77	65	35	29	269

（出所）大阪中華学校が生徒に関し行った統計をもと2008年12月1日に作成したものをもとに筆者作成。各項目は以下を指している。

- ① 純日本人は、父母ともに中国系ではない日本人生徒。
- ② 外国は、父母ともに日本人でもなく、中国系でもない生徒。
- ③ 中国（単）は、父母の一方が中国大陸出身、もう一方が日本人である生徒。
- ④ 中国は、父母の両方が中国大陸出身である生徒。
- ⑤ 台湾（単）は、父母の一方が台湾出身、もう一方が日本人である生徒。
- ⑥ 台湾は、父母の両方が台湾出身である生徒。

グラフ1 10年間（1998年と2008年）の生徒の割合の変化



出所：表3のデータをもとに筆者作成。

生徒は華僑華人が主体であったため、国籍による分類だけで、おおむね生徒の背景をつかむことができたが、父母ともに中国系ではない日本人生徒が増加することによって、国籍による分類だけでは生徒の家族背景が把握できなくなった。そのため、新たに「純日本人」というカテゴリーを作ったようだ。大阪中華学校側によれば、「『純日本人』とは、父母ともに血統上中国系でない日本人生徒を指しており、「純」と付けたのは、中国系の血統を

有しながら日本国籍を持つ華人や、父母の一方が日本人であるため日本国籍を有している生徒と区別するためだ」という。なお、父母の一方が日本人でもう一方の親が中国出身の場合は「中国（単）」。父母一方が日本人でもう一方が台湾出身の親を持つ生徒は「台湾（単）」に分類されている。学校側によると、「中国（単）」、「台湾（単）」の場合、もう一方の親はほぼ日本人であるとのことである。一件のみ台湾出身の父と中国出身の母の間に生ま



写真6 新聞・メディアも注目
(産経新聞2005年1月11日)

れた子があり「台湾(単)」に含まれているようだ。
表3からも明らかなように、10年前は「日本人」学生が皆無であった中華学校に、2009年4月現在には日本人が52人入学する予定であり、全校生徒の25%を占めるようになってきている。日本人学生が急激に増加した時期(2003~2005年頃)に大阪中華学校校長をつとめていた張桐齡前校長は、こうした入学熱について「学校側から日本の方に入学を呼びかけたことは一度もない。授業内容が口コミで広がっているようだ。『どうしても』といわれるので入学を許可しているが、あくまで華僑らを対象にした学校」と取材に答えている¹⁰⁾。また、10年間の推移を見ていると2003年頃から学生が急増しており、「学校教育法」が改正され中華学校の卒業生

に国立大学への入学が認められるようになったことも日本人生徒が増えた一因と見ることができる。また、新聞・テレビ・映画などで中華学校が多数取り上げられ、多くの人の注目を集めるようになったことも学生増加の原因となっているだろう。

横浜における2つの中華学校の資料も合わせて見てみたい。国籍別に見てゆくと、中国(台湾を含む)国籍を有している生徒は約3~4割程度であり、日本国籍を有している華人学生が大半を占めている。また、父母とも中国系でない日本人の生徒は横浜中華学院では3割、横浜山手中華学校では2003年の時点で2割を占めていた。「日本人学生が急激に増えたことにより華僑華人子弟の枠が減る」という苦情が寄せられ、各校では特別会議を開き、華僑学校設立の原点に戻り、日本人生徒の受け入れを制限することに決めた。そのため、山手中華学校の2008年の統計では、日本人生徒が全体の1割ほどにとどまっている。基本的には卒業生の子弟、そして華僑華人に優先枠を設けているが、受験に際して華僑華人か日本人かが合否の判断材料になることはないという。

また、表4の「中国」、表5の「新華僑」に関して一言説明を加える必要があるだろう。学校ごとに異なる表現を使用し分類を行っているが、これらはいずれも、1980年代以降に中国大陆から日本に移住した中国人の父母を持つ生徒を指している。なかには、中国で生まれ幼少期に来日した生徒も含まれている。容易に推測できるように、生徒の文化的背景、たとえば中国語能力ひとつをとっても千差万別である。

なお、統計と合わせ近年の生徒の背景を分析す

表4 横浜中華学院(小・中・高学部)の国籍別生徒数

年度	台湾	中国	日本籍華人	日本人	その他	合計
2006	46	55	115	94	2	312
	14.8%	17.6%	36.9%	30.1%	0.6%	

出所：横浜中華学院の資料をもとに筆者作成。

- ① 台湾は、中華民国国籍を保持する生徒。
- ② 中国は、中華人民共和国国籍を保持する生徒。そのほとんどは、1980年代以降中国大陆より来日。新華僑とも呼ばれる。
- ③ 日本籍華人は、日本国籍を有する中国系の生徒。
- ④ 日本人は、父母とも中国系でない日本人の生徒。
- ⑤ その他は、以上以外の生徒。

表5 横浜山手中華学校（小・中学部）の国籍別生徒数

年度	老華僑	新華僑	日本籍華人	日本人	その他	計
2003	25	140	136	86	9	396
	6.3%	35.4%	34.3%	21.7%	2.3%	
2008	16	120	263	46	2	447
	3.6%	26.8%	58.8%	10.3%	0.4%	

出所：横浜山手中華学校の資料をもとに筆者作成。

- ① 老華僑は、中国国籍を持ち日本に永住しているもの。生徒は主に日本生まれの3世、4世、5世など。
- ② 新華僑は、中国国籍を有し、主に父母が1980年代以降に来日したもの。中国で生まれ幼少期に来日した生徒も含まれる。
- ③ 日本籍華人は、日本国籍を有する中国系の生徒。
- ④ 日本人は、父母とも中国系でない日本人の生徒。
- ⑤ その他は、以上以外の生徒。具体的にはイギリス、シンガポール、カンボジアなどの国籍保持者が含まれる。

ると、以下のような傾向が明らかとなった。まず第1に、日本国籍を取得した中国系（華人）が増えていること。第2に、父母である華僑華人が国際結婚（おもに日本人と）しているケースが多いこと。第3に、日本、中国国籍以外に、マレーシア、イギリス、アメリカ、ナイジェリア、カナダなどさまざまな国籍、多様な民族的出自を持つ生徒が増えていること、第4に、重国籍を有している生徒が増えていることである。これらの傾向は、大半が中華人民共和国か中華民国の国籍を持つ華僑の子弟で構成されていたかつての中華学校の様相と明らかに違っている〔陳 2007b〕。

なお、今回は各中華学校の生徒数の統計を収集し分析を試みたが、統計を分析する以前の問題として、国籍や民族的出自によって生徒を分類することがきわめて難しくなっているのが実情であることが明らかとなった。各校は試行錯誤の末、以上のように分類をしているが、実際どこまで有効かつ正確であるかについては留保している。なによりも、国際結婚をした父母を持つ子が8割近くいるなか、「生徒に『なに人ですか？』という質問はもうできない」と神戸中華同文学校の愛新翼校長¹¹⁾はいう。また、大阪中華学校の蔣先生も、生徒には「もはや国で自分を規定するのではなく、地球人としての意識を持つように教育している」¹²⁾と話す。横浜中華学院の詹春雄校長は「本校は華僑の子弟の教育を目的としてきました。しかし、日本、イギリスやブラジルなど、さまざまな背景

を持った生徒が、校庭で一緒に仲良く遊んでいる姿を見ていると、本校は『多国籍』だと実感することが多いです」と語る¹³⁾。

IV 中華学校に通う日本人生徒

生徒数の統計や学校関係者のインタビューを通して、父母ともに日本人の生徒が増えていることが明らかとなった。以下では、中華学校に通う日本人生徒・後藤理子さんと、中華学校の卒業生である松北寿美恵さんのケーススタディーを紹介する。日本社会においてマジョリティである彼女たちが、なぜマイノリティが通う「民族学校」と見られてきた中華学校で学ぶことになったのか。そして、中華学校でどのような教育を受け、どのような文化や意識を身につけているのか。さらに、彼女たちを通して、本特集のテーマである「多文化共生」の新しい形について考えたい。

1 個性を伸ばす教育を求めて

現在小学3年生の後藤理子さん¹⁴⁾は、近年大阪中華学校に増えた「日本人」生徒の一人である。医師の父と研究所で助手をしていた母の3人家族だ。一人娘である理子さんの教育に両親は金も時間も努力も惜しまない。母は、理子さんが1歳足らずのころから言葉に敏感であることに気づいた。「家で遊ばせているとき、テレビの音声の言葉が急に外国語になると敏感に反応した」という。イ

ンターナショナルのプリスクールや日本の幼稚園などいろいろ試してみたが、理子さんの個性を伸ばしてくれそうな施設になかなか出会えなかった。悩んでいたところ華僑である友人に大阪中華学校を紹介されたのがきっかけで、幼稚部に体験入学をすることになった。先生の対応に理子さんも母も好感を持ち、理子さんが「この先生は、いい先生」と自ら通うことを望んだため入学することになった。幼稚部はよくとも小学部については意見を留保していた父も、授業参観の際に学校や先生の雰囲気を感じて娘の中華学校の小学部への入学を賛成した。「先生は子どもたちをしっかり見ており、それぞれの個性を把握している」と母は自分たちが探し求めていた教育に出会えたといわんばかりだ。

小学部に進学する際、理子さんは就学年齢に達していなかったが、学校側は個々の学生の条件や親の希望に合わせ融通を利かせ一年早く入学することを許可した。理子さんの母は、「入学と卒業が一年早ければ、のちのち日本の学校などに進学(転校)する際に、一年間受験の準備ができる。精神的に余裕ができ親としても都合がよい」と思った。母は「自分が学生時代に経験した『右に倣え的な教育』、つまり、クラス全員が同じであることを求められた画一的な教育に疑問を持ってきた。しかも、いまの日本の『ゆとり教育』にも不満を感じている」。自分にはもてなかった環境を娘に与えたい、語学が好きで娘の個性をもっと伸ばしてくれるような学校で教育を受けさせたいというのが希望だった。それに応えてくれたのが大阪中華学校だった。

子どもだけでなく親も多文化を学ぶ

両親とも日本人である後藤家では当然中国語を話さない。そのため、大阪中華学校に通わせはじめたころは、いろいろと不安があった。先生とのやり取り、連絡帳の内容、中国の慣わしに従った学校の行事など、わからないことはすべて学校を紹介してくれた華僑の友人に教えてもらった。また、友人には娘の宿題の補修を依頼したこともあった。勉強好きの娘は見る見るうちに中国語を習得し、いまでは読み書きも不自由なくこなし、しかもクラスで成績トップの座についている。学

校の先生も「日本人の生徒と親御さんは、高い目的意識を持って入学するため、日本人生徒の成績がトップということは少なくない」、また、「華僑華人の生徒たちにも、いい刺激になっている」と肯定的だ。

大阪中華学校は浪速区にあるため、後藤家がある芦屋から登下校するには決して便がいいとはいえない。毎朝車で送り、帰りは電車で迎えに行く母に「大変じゃないですか?」と聞くと、「それだけの価値がある」と満足気だ。帰りの電車のなかで、理子さんは仲良しの同級生の男の子・志明(中国生まれの華僑)と並んで座り、楽譜を広げ一緒に歌の練習をしていた。歌は中国語版「キラキラ星」。中華学校の学芸会では、生徒たちがこの歌を日・中・英の3ヶ国語で歌っている。

「中華学校の教育に不安はないか」という私の質問に対し、理子さんの母は「今は、意味もわからず台湾(中華民国)の国旗に向かって国家斉唱をしているが、中学になったら歴史教育も増えるだろうし、日中の過去の歴史について娘がどのように受け止めるのか、心配がないわけではない」と話す。また、「各種学校である中華学校の中学部へ進学させ、将来の進路に影響はないだろうかと不安に思うこともある」という。しかし、「中華学校では成績に順位をつけ表彰するなど、娘にはいい励みとなり勉強を楽しんでいる。いきいきしている娘を見てみると、中華学校に通わせてよかったと思うことのほうが不安よりも多い」と話す。現在3年生の理子さんは中学生になったら中国へ留学することを希望しており、両親としても、将来は国際的に通用する人間になってほしいと思っている。下校の電車のなかで歌の練習をする子どもたちを見守りながら、中学になったら息子を中国に送り返して学ばせようと思っている志明の母に、理子さんの母はわが子の留学について相談していた。来日してまだ数年足らずの志明の母は、片言の日本語を駆使して中国の教育状況を話していた。子どもたちだけでなく、中華学校に通わせている親たちも多文化を学んでいる。

2 中国文化を担う子どもたち

中華学校では獅子舞や龍舞、民族舞踊はもちろんのこと、学校によっては二胡や琵琶など中国の



写真7 孔雀舞を踊る大阪中華学校の学生たち

伝統芸能を学ぶ。男子生徒は主に獅子舞や龍舞、そして女子生徒は踊りを学ぶのが一般的である。学校で学んだ各種伝統芸能は学園祭や運動会など学内の行事で披露するだけではなく、「国際交流」や「多文化」を謳う地域の祭りやイベントなどに出演を依頼されることも多い。生徒たちは伝統芸能を通して社会のさまざまな活動に参加し、学外との交流や社会での経験を積み、身を持って「多文化共生」を実践している。

筆者が所属する国立民族学博物館で、『深奥的中国—中国西南部における少数民族の暮らしと工芸』と題する特別展示を開催した際、大阪中華学校の生徒に中国雲南省に暮らすタイ族の代表的な踊りである孔雀舞の公演を依頼した。民族舞踊を指導する先生と付き添いの保護者に率いられ、5年生から中学2年生までの女子生徒6人が公演に来てくれた。文字通り孔雀のような鮮やかな衣装を身にまとい優雅な孔雀舞を披露した。

化粧やリハーサルをしていた間、付き添いで来ていたお母さんたちと楽屋で話をする時間があった。そこで発覚したことは、出演者6人のうち半数が日本人生徒で、ほかの一人がインドネシア人の母と日本人の父を持つ生徒、そして残りの2人が中国系の生徒であるということだった。これが大阪中華学校を代表して中国少数民族の踊りを披露してくれた生徒の内実である。

なぜ中華学校に入りたいのか？

日本人の母親たちに娘を中華学校に入れた理由を聞くと、「日本の私立と同じ位の学費で英語・中

国語・日本語の多言語教育をしていることに魅力を感じた」とか、「これからは英語だけではなく中国語も重要になる」という理由をあげていた。また、勉強だけではなく「孔雀舞のように中華学校だからこそ身につけられる文化、またそれらを通じた社会活動から子どもたちは多くのことを学んでいるし、親としてもさまざまな発見があってありがたい」と話した。

中華学校のカリキュラムが華僑華人の教育を目的にしている各種学校であるため、日本人保護者が子どもを中華学校に通わせるということは就学義務を違反することになる。かつての中華学校を知っている筆者としては目を疑うほどだが、インターネットに中華学校「お受験」のための塾のサイトや日本人保護者らによる「口コミ情報」⁵¹が掲載されている。また、なかには横浜中華学院に息子を通わせるために、わざわざ東京から横浜に引越した家族もある。貿易コンサルタントをしている父は「仕事柄、お隣の国（中国）の経済発展を肌で感じており、（息子が）今から言葉だけでなく文化や人間関係など国際感覚を身につければ将来きっと役立つと思う」という。

筆者が調査のため横浜中華学院の職員室を訪れた際、南米系と見られる母が息子に付き添い先生に質問にきていた。小学校低学年と見られる褐色肌の男の子は、宿題である中国語の作文ができず、放課後に個別指導をしてもらっていた。母に話を聞くと「（私）ブラジル人。日本人の夫と結婚して日本に住んで十数年になるの」という。日本人の父とブラジル人の母の間に生まれた男の子は、明らかに中国とは縁もゆかりもない。「なのに、なぜ中華学院に入れたの？」と母にたずねると。母はポルトガル語なまりの日本語で「これからは中国でしょ！」と当たり前だといわんばかりに答えた。

ほかに、これまで各校の関係者や保護者に対しインタビューや調査を行ったところ、中華学校入学希望者（特に中国系でない子）が増えている理由は、以下にまとめることができる。①中国の経済発展に伴う中国語ブームの影響、②中国語、日本語、英語など多言語教育を行っているが、インターナショナル・スクールに比べ学費が安価なため。③中国、香港、台湾、シンガポールなど中

国語圏で駐在していた日本人帰国者の増加、④日本の公立学校の教育内容への不満、⑤学校教育法の改正に伴う中華学校卒業後の進学問題の解決、⑥いじめ問題の回避、などである。

確かに中国の経済発展や中国語ブームは目を見張るものがある。しかし、中華学校に日本人生徒が増えたのは、以上に挙げた外部的な要因だけではなく日本人や日本社会の内部的意識の変化が見られる。それはアジア系の「民族学校」に対する意識の変化が挙げられる。前述したように、かつて、欧米系の外国人学校は「インターナショナル・スクール」、アジア系の外国人学校は「民族学校」と呼ばれていた。日本では「国際化」といえば「欧米化」と認識されていたのが、近年では、アジアにも目が向けられるようになった。日本人の海外旅行の目的地にアジアが増えたこと、アジア系の外国人が増えたこと、そのほかにも映画や料理、語学などさまざまな媒体を通し日本人の外国文化の吸収のあり方が、かつての「欧米一辺倒」から多様化し、アジアにも向けられているのがわかる。これが、中華学校への入学希望者の増加にもつながった一因と考えられる。

政府と市民の意識のギャップ、学校側の対応

2003年文部科学省は「学校教育法」を一部改正し、外国人学校の卒業生に国公立大学入学資格を認可する際、当初、欧米系の学校に限定した¹⁶⁾。「それはアジア系の民族学校に対する明らかな差別だ」という反対意見が多くあがり、署名活動も行われた。ここで注目すべきは、問題が発生した当時、政府のアジア系の学校に対する排除にもかかわらず、中華学校への日本人の入学希望者は減少しなかったことである。「民族学校」に対するイメージや意識に、政府レベルと市民レベルでは明らかなギャップがあること、また市民レベルでは、より多民族化・多文化化が浸透していることが見受けられた。その後、文部科学省に意見書が提出され、最終的にアジア系の学校にも欧米系の学校と同様の資格が与えられ、中華学校への入学希望者はさらに増えた。

同じアジア系の「民族学校」と比較を行いたいと思い、東京朝鮮学園の任京河先生に、「日本人」学生の入学希望者について伺ったところ、「朝鮮学

校では朝鮮系でない学生をいっさい受け入れていない」とのことであった¹⁷⁾。そのため、日本人のアジア系「民族学校」一般への意識の変化については、残念ながら比較分析はできない。しかし、同じアジア系の「民族学校」でも、学校によって対応がまったく違うことが明らかとなった。つまり、中華学校は日本人生徒の募集を積極的に働きかけなかったにせよ、朝鮮学校のように、いっさい受け入れないという方針とはらず、可能な限り非中国系の生徒を受け入れてきた。華僑華人の保護者からの紹介や、近隣の日本人の友人や知人など、日ごろからの付き合いもあり、希望さえあればできる限り受け入れ、民族的な出自を理由に入学を断るということはしてこなかった¹⁸⁾。

大人の思惑や固定観念の限界

船会社を経営する大川さんは、最愛の孫娘・恵を会社の後継者に育てたいと思い、華僑の友人に仲介を依頼し中華学校に転校させた。2003年、恵が5年生の時である。はじめは、家から遠く（通学に約1時間）、しかも友達のいない中華学校への転校を泣いて拒否していた恵が、今では中国語も達者になり成績はクラスで上位である。友達や先生との関係も良好だ。高校受験をひかえ、祖父は「次は英語力をつけるべく国際学校への進学を勧めたが、恵に『中華学校に残りたい!』ときっぱりいわれてしまった」そうだ。「理由を聞くと『友達と別れたくないし、なによりも身につけた中国語と獅子舞を誇りに思っている』といった」と頭を悩ませている¹⁹⁾。

「中国語を身につけさせるため」という保護者の思惑も理解できなくないが、いったん中華学校に通うと、当然のことながら中国語の勉強以外にも、子どもたちは多くのことを学び、吸収する。獅子舞をはじめとする文化しかり、交友関係しかり、場合によっては彼らのアイデンティティや人生にも影響を及ぼすことだろう。大阪中華学校を代表して孔雀舞を踊ってくれた子どもたちや獅子舞に誇りを持つ恵は、文化や自分の社会的立場に対し先入観や固定観念を持つことなく、きわめて寛容である。私たち大人は、しばしば、中国文化の担い手＝中国系という先入観をもってしまいがちであるが、そうした束縛から解放されるべきである

と気づかせてくれる。子どもたちは、保護者の思惑や世界観を超える「多文化共生」の新しい姿、小さな体ながらも立派に体言している。

3 日本人卒業生からのメッセージ

大学などで中国語の講師を務めている松北寿美さんは神戸中華同文学校の卒業生だ²⁰⁾。現在、中華学校に通う日本人生徒はクラスの一割を超すようになり珍しくなくなっているが、松北さんが神戸中華同文学校に通っていたころ日本人生徒はまだ希少な存在だった。

松北さんは日本人の両親のもと1978年神戸で生まれた。母の実家は中央区にあり、母方の祖父は元町ですし屋を経営していた。元町界隈には南京町があり華僑華人が集住している地域である。祖父が経営する店には華僑華人のお客さんが多く出入りしており、松北さん一家は日ごろから華僑華人と交流があった。松北さんは三人姉妹で一家は北区に住んでいたが、姉妹みな母の実家の近所にある神戸華僑幼稚園に通った。

チャンポン文化

幼稚園の先生は神戸中華同文学校の卒業生が多く、みなバイリンガルだ。園児とのコミュニケーションも日本語と中国語^{ハオ}両方を使っている。「老師好！(先生こんにちは)」「再見(さようなら)」など、挨拶は基本的に中国語を使い、他の会話は日本語を使うことが多い。「我と你と一緒に玩しよう(私とあなたと一緒に遊ぼう)」と一文を日本語と中国語のチャンポンで話したり、「えーと」、「ほいで」など、中国語の間に日本語を混ぜて話すこともある。たとえば、横浜中華保育園の園児は食事の後^{フオスーシェン}に手を合わせて「ごちそうさまでした。老師謝謝(先生ありがとう)」というのが慣例だ。

松北さんは、中国や日本の歌、絵本や紙芝居も二ヶ国語で学んだ。点呼も中国語でした。園児の名前を中国語読みするため、松北は「ソンペイ」という発音になる。松北さんは幼稚園の頃から、先生や同級生に「ソンペイ」と呼ばれるようになった。そのため、日本の高校に入ってから日本語で「マツキタさん」と呼ばれるのに慣れるまで時間を要した。「『ソンペイ』のほうが自分のような気がする」と中国語読みの名前にアイデンティティを感じて

いる。

松北さんが小学校にあがる頃、自分をとても可愛がってくれた祖父が他界した。その頃、姉二人はすでに地元北区の公立小学校に通っていたが、かねてから「せめて一人は同文(神戸中華同文学校の略称)に入れてみては」とっていた祖父の願いを叶えようと母は末っ子の松北さんを中華同文学校へ入れることを希望した。松北さんの父は「公立より学費が高く、しかも得体の知れない学校」に娘を入学させることを強く反対したが、祖父が「寿美恵の同文の学費に」と残した遺産を見てしぶしぶ首を縦に振った。

「地元の教育委員会から義務教育を受けさせないのは法に違反するという忠告もあったが、気持ちは怯まなかった」と松北さんの母は振り返る。中華学校はあくまでも華僑華人子弟のための学校なので、華僑華人でない生徒が入学を希望する際、かつて保護者たちは、「(家庭で中国語の教育・サポートができないため)自分の子の中国語能力が他の生徒から著しく後れ、他生徒の学業進展に影響を及ぼす場合は退学をする」という約束を学校側と交わっていたそうだ。松北さんの母は、夫には反対され、学校側には誓約書を求められたにもかかわらず中華同文学校を選んだ。祖父と近隣の華僑華人たちの誼を子どもたちにも伝えたかったのだろうか。

同級生は華僑華人といえども、家では日本語を使用していることが多く、中華学校に入ってはじめて中国語を学ぶという子がほとんどだ。そのため、「しっかり勉強さえしていれば日本人生徒が中国語の面で他の華僑華人生徒にひけをとることは、現実的にはなかった」と松北さんは振り返る。実際、家で中国語を使わなかった彼女でも学校教育のみで中国語が不自由なく使えるくらい身につく、夢も中国語で見ていたほどだ。

しかも実際入学してみると、学校側は宿題を終えられなかった生徒や成績が芳しくない生徒に対しては、放課後に「居残り」をさせ、先生がしっかり勉強をサポートする体制が組まれている。また宿題の量も多い。教科ごとにたくさんの宿題が与えられ、生徒たちは宿題に毎日1時間半から2時間は費やすという。中華同文学校を卒業した後、進学校といわれる日本の公立高校、国立大学を経

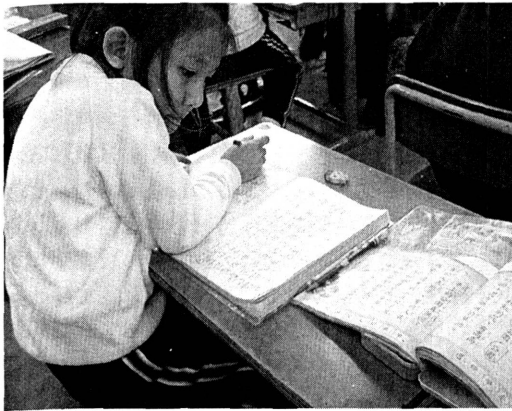


写真8 放課後に補習を受ける生徒

で中国に留学し、その後大学院マスターコースを潜り抜けてきた松北さんに、「同文に通っていた頃が人生で一番勉強していたと思う」といわしめたほどだ。現在、中華同文学校に子どもを通わせている保護者たちも、「同文は、勉強をみっちり叩き込んでくれるので塾に通わせる必要はありません。しかも、宿題が多いので塾に行く体力も時間も無い」と話す。

学校での授業は基本的にすべて中国語で行われるので、松北さんは算数の九九を中国語で覚えた。「今でも暗算の際は頭のなかで中国語を使っている」、また「漢字の書き順も中国風なので、大学で板書する際に学生に『先生の書き順は変だ』といわれる」と松北さんは笑う。

教科書も基本的に中国のものを使うため、松北さんが社会科で学んだ知識は、日本よりも中国についての知識のほうが豊富である。地理は日本の都道府県よりも中国の各省がどこにあるかのほうが知っているし、歴史も他国より中国の歴代の朝廷のほうが詳しい。当然だが教科書は中国の視点から記述されているため、「日中戦争」でなく「中日甲午戦争」と学んだ。その内容に関する記述も、もちろん中国のスタンスに立ったものである。松北さんは、日中戦争の歴史を中華同文学校の授業で学んだときのことを今でも鮮明に覚えている。日本人として「中国人に申し訳ないことをしたと思った。できることなら、自分はしっかり中国語や中国のことを学び、将来日中間の架け橋になりたいと思った」と当時を振り返る。

歴史の授業を受けたあと、日本人である松北さんに対する偏見やいじめはなかったのかと聞くと、「みんな親が国際結婚しており、両親が日本人と中国人の学生が多かったので、誰が日本人で誰が中国人かという線引きはしにくかったし、そんなことをみんな気にしていなかった」という。「しかも、私が純粋な日本人だとは、みんな思っていなかったかも」と笑った。

「中国人や」といわれて

アイデンティティ教育について聞いたところ、松北さんが中華同文学校に通っていた頃、ほとんどの生徒が華僑華人だったため、先生は「中国人としての自覚を持つように」と生徒たちに教育していたそうだ。特に、「学生一人ひとりが必要な中国人を代表しているのだから、日本社会では悪いことをしないように」と学生を戒めていた。また、日本人である松北さんは、「同文の制服を着ている以上、他の人には中国人と見られるだろうから、そのつもりで」といわれた。中華同文学校では、中国人か、日本人かということで差別を経験してこなかったのだから、先生の意図することをよく理解できずにいた。

中学に上がった頃だったのだろうか、松北さんは放課後帰宅する途中、「近くの中学校に通っている生徒たちの集団に『あいつ同文や、中国人や』とゆびさされた」という。中華同文学校の制服を着ていたのが目に付いたのだろう。そのとき、松北さんは「悔しく思い、『日本人や』とか『中国人でなにが悪い?』と言いつつ返そうとしたが、踏みとどまって、しなかった」。なぜかと聞くと、「なんの解決にもならないし、そんな返答は間違っていると思った」という。むしろ、「『〇〇人』と、国でしか人を見れない彼らを哀れに思った」と振り返る。このとき、先生の忠告が意図することを身にしみて感じたと同時に、人の弱さ愚かさも感じたそうだ。

松北さんは、中華同文学校を卒業したのち地元でも名が通る進学校に進んだ。日本の公立高校に入学し、いろいろな面で「逆カルチャーショック」を感じるが多かった。日本の学校での慣習や学校で使うさまざまな用語がわからず戸惑いを感じるが多かった。日直、日誌、号令、ホームルーム委員などの用語を知らなかったため、何をするのかかわか

らず、間違っただけをしてしまわないか緊張することが多かった。同級生との関係や距離感も中華同文学校と日本の学校では微妙に違っていた。「同文の友人の場合、お互いの家族関係、両親の職業、兄弟関係など、お互いにまつわるさまざまなことを知っているのが当然であったが、高校に入ってからの友人との付き合いは、その子との関係にとどまり、家族や他のことまで包括的に分かち合うことはあまりなかった」そうだ。そういった意味では、「高校に入ってからの交友関係は正直いって表面的なもののように感じられた」という。疎外感を感じ高校を中退することも考えたが、ちょうどそんな時期にボーイフレンドができ、学校を辞めることを踏みとどまることができた。

高校卒業後、大学では中国語とはまったく関係のない勉強をしていた。交換留学の選抜テストを受け香港の大学へ留学することを希望していたが、英語よりも中国語の能力が評価され吉林大学へ派遣された。吉林大学の留学生クラスの授業内容では簡単すぎたため、本科のクラスで授業を受けた。吉林大学の先生には、「南方系のアクセントが強い」と中国語の発音を直された。「確かに中国のネイティブの先生と同文で教鞭をとっていた華僑の先生の発音に差があった。しかも、同文で学ぶ中国語は和製中国語が少なからずあった」こともこのとき知った。

自分にしかできないこと

大学を卒業後、自分のなかにあったアイデンティティの葛藤など「もやもやした気持ちを整理したい」と思い神戸大学大学院の国際文化研究科に進学した。中国研究や華僑華人研究を専門とする教授の研究室に入り、修士論文は「陳舜臣のアイデンティティ」をテーマとした。中華同文学校で経験した「中国的」なもの「日本的」なものが混ざっているのが当たり前である環境、そして、同校を卒業した自分は「半端者」に見えるであろう日本の高校や中国などで経験したマジョリティの環境、この二つの環境、そしてそのギャップにどう対処すべきか自分なりに答えを見つけたかった。

大学院を修了するころ、「同文でお世話になっていた金翼（改名し、現在愛新翼）先生に、地元の学校や大学で中国語を教える人を探しているが、引き受けてくれないか」と連絡があった。ネイティ

ブに教えてもらったほうがいいだろうと思い、はじめ躊躇したが、「金先生に君にしか教えられないことがある。自信を持ちなさい」と励まされ、中国語教師になることを決心した。

「ネイティブの先生と比べ、発音などいろいろな面で自分が劣ることがあるのは重々承知している。しかし、日本語の言い回しと中国語の言い回しの違いや類似点、場面による会話の仕方ややりとりについて日本の学生にどう教えればよいのかには自信を持っている。日本語のニュアンスがわからない中国人のネイティブの先生には、なかなか説明できないだろうけど、そういうのは得意です」と松北さんは自信を持つ。言葉の奥にある文化、しかも両方熟知していないとなかなか人には教えられないのだが、幼い頃から中華学校に通い、日中双方の文化・社会に身をおいた経験を持つ松北さんだからこそ実践可能なだろう。

松北さんは、高校でも中国語の教師をしているが、最近危惧していることがあるという。「中国語を取り入れている高校では、しばしば中国の経済発展に触れ『これから中国市場はますます大きくなっていく、中国語をやっておくと時代の先端をつかめる』などといった理由で学生に中国語学習を勧めている。でも、経済云々よりも、言葉を学ぶことによって、それぞれの言葉の奥に潜む文化の違いの面白みを吸収してほしいと思う」という。本当の意味での言語の習得は、文化理解にあり、その奥に「多文化共生」につながるヒントがあると松北さんは考えている。

姉たちは、中華同文学校を卒業し、中国語をマスターした妹の松北さんを誇りに思っている。現在2人の姉の子どもたち計4人は、みな中華同文学校の小学校と幼稚園で学んでいる。増えた日本人生徒を制限している中華同文学校では、卒業生など関係者を優先しているため、甥や姪たちは卒業生である松北さんにあやかり狭き門に入ることができた。「小さいころから同文に入っていたら『なに人』というのは無意味であることを体で学ぶ。これからは担う子どもたちには、そんなことを身につけてほしい」と松北さんと家族は思っている。

松北さんは、大学や高校の学生たちについて「基本的なマナーをもっと身につけてほしい」と厳しい教師の一面を見せる。「ベルが鳴ったら着席す

る、先生には礼儀正しくするなど当たり前のことができない学生が多い」と嘆く。そういったところに目がいてしまうのも中華同文学校の卒業生ならでわだ。愛新翼校長によると、「同文学校では『德育教育』を重んじており、ベルが鳴ったら席に着くことは当然で、礼儀正しくすること、先生を尊敬すること、掃除の実践など身をもって社会と交わり貢献するよう厳しく教育している。最近では忘れられてきている礼儀作法など社会的教育が中華学校では今でもしっかりと残っており、そうしたことを求めて中華学校に子どもを入学させたがる保護者も多い」そうだ。また、道德教育のほか、学生が自分に自信を持つよう教育に配慮している。「自分が持っている文化、置かれている環境に誇りを持ち、そして学んだ中国語を将来活かすよう教育している」と語る²¹⁾。

マイノリティとしての経験が糧

松北さんは、中華同文学校で中国語や道德教育、友人関係などさまざまな収穫があったが、なによりも「マイノリティになるという貴重な経験ができてよかった」という。「マイナーな存在としての立場を経験したことで見えてきたものが沢山あった。また、同文では、みんなそれぞれ自分の個性を持ち、お互いの違いを認め合うことが当然であった。自信を持ち、自分の両足でしっかり立つ方法を学んだ」と振り返る。中華学校で、中国語を身につけるだけでなく、マイノリティである華僑華人の生きる知恵²²⁾を学んだのが、彼女には貴重な経験となっている。

松北さんは、中華同文学校時代、日本人ながら「中国人や」といわれ、マイノリティとして扱われることを体験した。その際、人を「〇〇人」と見なすことの愚かさを強く身にしみて感じた。

また、中華同文学校の交友で、誰が中国人で誰が日本人であるのかを問うことはなかった。学校ではマイノリティであるはずの彼女が肩身の狭い思いを感じることはなかったという。近頃になって社会では「多文化共生」が議論されているが、中華学校、そして華僑華人社会では、華僑華人自らが移民であるため、多文化が共生しているのは当たり前のことであっただけでなく、個々のアイデンティティを尊重することは当然のマナーで

あったことがわかる。また、華僑華人社会では、中華学校の話し言葉一つとっても、チャンポン文化が根付いていることがわかる。

松北さんは、「多文化共生」は、言葉の習得だけではなく、その奥にある文化理解の重要性を強調した。バイリンガルであり、また中国語を教える彼女は、「意思疎通は、言葉よりも気持ちや考え、文化を知ることが大切」であると考えている。近年、「多文化共生」の実践として、自治体は必要な情報を多言語表記するなどのサービスを広げている。今後は言語情報を提供するだけではなく、文化理解も必要になるであろう。また、異文化出身者の習慣や価値観の理解も求められる。

日本人ではありながらも、幼少から中国文化と深く接し、現在中国語を教える職についている松北さんの存在は、「多文化共生」を実践しようとする日本社会においては先駆的な存在であり、多くのメッセージを投げかけてくれている。

V おわりに

中華学校に通う日本人の子どもが増えている。こうした現象を、「中華学校設立の意義からして本末転倒だ」と危惧する声もあれば、「多民族共存の前兆であり望ましい」との意見もある。

危惧する声は、中華学校は華僑華人子弟の教育を目的としており、多くの華僑華人の子どもたちが中華学校の教育を受けられないでいるにもかかわらず、日本人が入学している現状は理解できないとするものだ。また、日本人生徒の増加によって学校側の負担が増えているのも確かである。一方、中華学校をかつてのように「民族学校」として他者化するのではなく、わが子をグローバルな人材として育てるための選択肢として内部化する日本人が増えたことに好意的な意見もある。

中華学校に対するニーズが多様化している背景には、グローバル化に伴う社会の変容に起因している。日本社会はもはや欧米一辺倒の「国際化」ではなく、「多文化共生」を視野に入れなければ生き残れない状況におかれている。中華学校としても、華僑華人生徒のみを射程に入れた教育内容から、国際結婚のもとに生まれた子やさまざまな出自を持つ生徒、そして多様化する生徒たちの進路

に答え得るような教育の実践という重い任務を課されている。

「多文化共生」の定義や議論については本特集の他の論稿で詳しく触れられているので、ここで詳述するのを控えたいが、中華学校に通う日本人の子どもたちのケースを通して、見えてきたことを、以下3点にまとめ触れさせていただきたい。

まず第1点として、近年日本で謳われる「多文化共生」は、「日本人対外国人」の構図、そして「主人」は日本人、「客人」は外国人であるという図式が暗黙の了解になっている。

日本人が中心であり優位にあるということが前提となっており、「困っている外国人を助ける」という主客の立ち位置の固定化が見られる。

しかし、真の意味での「多文化共生」は、優位な一方がもう一方を助けるという構図や、「日本人対外国人」という関係ではなく、それぞれの違いを認め、対等な関係を築くことによって実現される。「主人」と「客人」の立ち位置の固定化を避けることで、同じ土俵、対等な立場での対話と理解を導くことができる。マジョリティであったものがマイノリティの立場を経験することも大切である。

本論で見てきた中華学校に通う日本人の子どもたちは、マイノリティになることを経験することによって、一人ひとりが対等な関係であることを認識し、それぞれの友達とつながりを築いている。彼らは、「主人」である日本人の中心性、優位性に基づいた「多文化共生」の図式ではなく、真なる意味での対等な「多文化共生」を実践している。

また、直接関係はないが一点付け加えておきたいことがある。松北さん同様、理子の母も中華学校の交友関係について、「仲良しグループを作ってグループ以外の子とは関わりを持たないという付き合い方をするのではなく、中華学校では、一人ひとりがみんなと対等なつながりを持っているのが特徴的だ」と触れていた。このように、包摂と排除の構図を作らない人の関わりあいは共生の一番の近道であろう。

第2点として、日本で語られている「多文化共生」論は、1980年代以降に来日したニューカマーが主な対象となっており、在日コリアンや華僑華人など、半世紀以上前から日本にいた外国人が視野に入れられていないという欠点がある。[川村

2008]

近年になり、中華学校に通う日本人生徒が増えてきたことは統計からも明らかになったが、在日コリアンや華僑華人たちが運営する学校は「民族学校」として日本社会に他者化されてきた。また、中華学校は各種学校として扱われ、学校と学生は不条理な障壁と負担を負っている。「多文化共生」の理想論を語る前に、目前にある数十年間他者化されてきた中華学校の境遇に疑問を投げかける必要はないだろうか。中華学校の卒業生たちの進路を狭めるのではなく、多文化を身につけた彼らに活躍の場を与えることが日本の「多文化共生」の実現に有益なのではないか [杜 1991]。

日本人生徒が増えたことにより、より一層中華学校の多文化性・多民族性が注目されるようになってきているが、「中華学校にとって『多文化共生』は、もともとあったことで、当たり前のこと」と神戸中華同文学校の愛新翼校長はきっぱり言う。「生徒たちには、つねづね自分に自信をもち、他の人にも同じように認めるよう教育している。その術は、マイノリティとして日本に暮らしてきた華僑華人たちの長年の知恵より受け継がれている」と述べた。マイノリティである華僑華人たちが培った知恵を日本社会のマジョリティとして生まれた子どもたちが学んでいる。ニューカマーとの「多文化共生」は勿論重要であるが、すでに数十年間共生してきた人々の存在を過小評価するのは愚策である。

最後に第3点として、「多文化共生」は、理想とする社会のあり方として描かれているが、私は社会というレベルで「多文化共生」を語るのではなく、個人レベルで「多文化共生」を認識・実践することが重要であると考えている。一人の個人を民族や出自などエスニックな背景によって規定するのではなく、その人の出自にかかわらず、人はそれぞれ多様な文化的要素を内包していることを認めることが大切である。

中華学校に通う日本の子どもたちが中国語や中国文化を身につけている。大阪中華学校を代表して孔雀舞を踊った日本の子どもたちをはじめ、獅子舞にアイデンティティを感じている恵、そして中国語を教えている松北さんは個人レベルでの多文化共生を体現・実践している良い例である。い

うならば、個人の「内なる多文化共生」である。

中国語習得という目的のみで子どもを中華学校に就学させているのであれば、あまりにも表面的であり残念なことだろう。松北さんのいうように、彼らは中華学校で中国語を学ぶだけではなく、文化の底流にある伝統や価値観も習得した。また中華学校はアイデンティティ確立の場でもあり、社会においてマイノリティである華僑華人の子どもたちに、自分に自信を持ち、自分の両足でしっかり立つサポートをしてきた。また、人や社会とどうかかわり合い、いかに生きていくべきかという知恵を学ぶ場でもある。

中華学校は「多文化共生」を言葉で語るのではなく、体で学び、実践する場である。中華学校に通う日本の子どもたちは、新しい形で「多文化共生」を、一つ一つの小さな体で体現している。いま中華学校で学ぶ子どもたちが、社会の主役となる近い将来、彼らが真なる意味で「多文化共生」を牽引する人になるのであろう。

謝辞

本研究は文部科学省科学研究費（19720238）の助成を受けて行われた。また、調査に際し、インタビューのほか資料の提供にご協力くださった各学校の関係者の方々に心からお礼を申し上げる。

注

- 1) 華僑華人とは広く海外に居住する中国系の人々を指す。華僑の「僑」は「仮住まい」という意味を有しているため、「華僑」とは中華人民共和国または中華民国（台湾）の国籍を保持する者もしくは無国籍〔陳 2005〕のまま居住国に在住する中国系の人を指している。一方、「華人」とは、居住国の国籍を取得した中国系の人々を指している。
- 2) ここでいう「日本人」とは、後に述べる大阪中華学校側が指す「純日本人」と同じ意味で使っている。つまり、両親が中国系の血統をひいていない日本人生徒を指している。中国系で日本国籍を有している生徒は「華人」もしくは「日本籍華人」と表し区別する。
- 3) 発音記号を指す。近年は、注音符號のほか、ピンインも学ぶようになっている。先生に聞い

たところ「小学生でも電腦（パソコン）のクラスがあり、パソコン入力に便利のため」というインタビューより。

- 4) インターナショナル・スクールは狭義的には、特定の国の教育に依存しない教育課程を使用し、初等教育や中等教育を行う教育機関を指すと定義されている。なお、特定の国籍・民族を対象とする教育機関も広義的にインターナショナル・スクールと捉えることもある。また、そのような教育機関を民族学校と呼ぶこともある。
- 5) 1994年、朝鮮学校の女子生徒の制服であるチマチョゴリが、通学中に切り裂かれるという事件が多発した。これをきっかけに、朝鮮学校では、「第二制服」と呼ばれるブレザーの制服がつけられた。現在では、ほとんどの学校で「第二制服」が着用されている。
- 6) 孫文は1897年来日した際、「中西学校」の設立を提唱した。その翌年、現在の横浜中華学院、山手中華学園の前身となる「大同学校」が設立された。なお、大同学校は、世界で最も古い「華僑学校」といわれている。
- 7) 戦前は、北海道、静岡、京都、島根、長崎にも中華学校があった〔張 2008〕。また戦後、1949年中華人民共和国の成立に伴い、華僑にとっての母国は事実上分裂した形となり、華僑社会もイデオロギーの相違により、中国大陸支持派と中華民国台湾支持派に分裂した。1952年、横浜では、学校の所有権や教育内容についても論争が起こり流血事件にもつながった「学校事件」が起こっている。
- 8) たとえば、2008年5月中華人民共和国・胡錦濤総書記が来日した際、多忙なスケジュールのなか横浜山手中華学校を訪問し生徒や華僑華人による大歓迎を受けた。学校までの道程は厳重な警備体制がしかれ、あたりは一時すべて通行止めとなった。
また、2008年中華民国の総統に就任した馬英九総統も、2007年11月に横浜中華学院を訪れ、「生徒たちが寒い中、獅子舞を披露してくれた。海外の華僑同胞がこのように積極的に伝統文化を保存しようとしていることに非常に感動した」と語っている。（『大同』民国97年（平成20年）

- 盛夏号より)
- 9) 『横浜華僑通訊』第420号、2009年1月1日発行。
- 10) 2005年3月25日「中華学校進学じわり増加」『産経新聞』夕刊一面。
- 11) 2008年12月11日、神戸中華同文学校で行ったインタビュー調査より。
- 12) 2008年12月10日、大阪中華学校で行ったインタビュー調査より。
- 13) 2007年5月10日、横浜中華学院で行ったインタビュー調査より。職位はインタビュー当時。2009年3月31日に校長の職を退任された。
- 14) 2008年12月10日、後藤理子(仮名)さんと母にインタビュー。
- 15) <http://www.itscom.net/contents/maegumi/hogoshakai/pta/005.html>, <http://oshietel.goo.ne.jp/qa1010565.html> など。
(最終アクセス日2009年1月13日)
- 16) 「外国人学生卒業生大学入学資格付与欧米系に限定、中華学校・朝鮮学校は対象外」『横浜華僑通訊』351号、2003年4月1日発行。
- 17) 2007年7月、東京朝鮮学園にてインタビュー。
- 18) 非朝鮮系の学生は受け入れていないが、朝鮮学校では日本国籍を取得した学生が増加している傾向にあることは先行研究からも明らかにされている(金美善「在日コリアンの母語(民族語)教育について—総連系朝鮮学校のバイリンガル教育を中心に—」『トランスボーダーの人類学』国立民族学博物館国際シンポジウムにて発表、2007年3月)。
- 19) 2008年12月15日、横浜にてインタビュー。
- 20) 2008年12月9日、神戸にてインタビュー調査を行った。
- 21) 2008年12月11日、神戸同文学校にてインタビュー。
- 22) 華僑華人が場所に応じて柔軟にアイデンティティを変容させ、それを生きる術とした。その様子は虹に喩えられている[陳 2001]。
- 参考文献
市川 信愛
1988 『華僑学校教育の国際的比較研究』上・下、宮崎大学教育学部社会経済研究室。
- 梶田 孝道(編著)
2001 『国際化とアイデンティティ』ミネルヴァ書房。
- 過 放
1999 『在日華僑のアイデンティティの変容』東信堂。
- 神奈川県渉外部国際交流課
1992 『ともに 見る、知る、考える。在日韓国人・朝鮮人と私たち』明石書店。
- 川村 千鶴子(編著)
2008 『「移民国家日本」と多文化共生論』明石書店。
- 神戸青年会議所(編)
2008 「神戸の中の世界 インターナショナルスクールの取り組み 未来をつくる子どもたちを通して」『若い力』vol.73、p18。
- 神戸中華同文学校(編)
2000 『神戸中華同文学校建校百周年記念刊』。
- 駒井 洋(編著)
2003 『多文化社会への道』明石書店。
- 庄司 博史・金 美善(編)
2006 『多民族日本のみせかた——特別展「多みんぞくニホン」をめぐる』国立民族学博物館調査報告64。
- 張 玉玲
2008 『華僑文化の創出とアイデンティティ』ユニテ。
- 陳 天璽
2001 『華人ディアスポラ——華商のネットワークとアイデンティティ』明石書店。
2005 『無国籍』新潮社。
2007a 「危機を機会に変える街——チャイナタウン」『現代思想』vol.35-7: 84-72。
2007b 「多民族化する日本の中華学校」『アジア遊学 特集現代日本をめぐる国際移動』104号: 142-151。
- 杜 國輝
1991 『多文化社会への華僑・華人の対応—日本・台湾における華僑学校卒業生の動向分析』(トヨタ財団研究助成報告書019号) 横浜中華学院。
日本法務省入国管理局
各年版 『在留外国人統計』。

山下 晋司

2007 「出ようかニッポン、行こうかニッポン」
『アジア遊学 特集 現代日本をめぐる国際
移動』104号：4-11。

横浜中華学院（編）

2000 『横浜中華学院百週年院慶記念特刊』。

2007 『創校百十週年紀年特刊』。

横浜山手中華学校（編）

1999 『横浜山手中華学校百年校慶』。

新聞資料

『朝日新聞』

『関西華僑報』

『神戸新聞』

『産経新聞』

『大同』

『横浜華僑通訊』

(2009年5月7日採択決定)

Japanese Students in Chinese Schools

CHEN Tien-shi

Keywords: “Multinational coexistence”, Chinese School, Overseas Chinese, minority

Ethnic schools (*minzoku gakko*) were established in Japan as the number of foreign residents in the country increased. The main purpose of the ethnic schools was to educate children with a certain ethnic background in the mother tongue, culture and history of their home country. Therefore, they were not intended for students of Japanese and other nationals.

However, ethnic schools today have experienced a drastic change on account of the rapid growth in the transnational flow of people, coupled with international marriages and the transition of generations into Japanese society. In addition, globalization has led many Japanese parents to send their children to ethnic schools for multilingual education. As a result, in some Chinese schools in Japan, ethnic Chinese students with Chinese nationality have become rather a minority. The majority of students are Japanese, and some students even have no ethnic relationship to any Chinese predecessor. There are also students of other foreign backgrounds.

Eventually, students in Japan from multiethnic backgrounds are studying in the same class, speaking mixed languages, and learning the Chinese lion dance after school. Their nature has become much closer to that of international schools, which are more open to students with different ethnic and cultural backgrounds. Also, classification by ethnicity has become difficult, because of the increase in the number of children with mixed ancestry. Therefore, people's perceptions toward minority ethnic groups, as well as toward ethnic schools, have also changed.